とある戦場にて

舞月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある戦場にて

【Ｎコード】
Ｎ０２７３Ｏ

【作者名】
舞月

【あらすじ】
新物質の発見により、環境技術が飛躍的に進歩し、人々は環境について考えなくなった。自国内では団結するが、他の国に対しては、敵対意識を表すようになった人間たち。平和な帝国日本の兵士の一日を、ここに記録する

この戦場での仕事は終わった。次はまた別の戦場に行く。環境技術と軍事技術共に格段な進歩を遂げてから、戦争で排出される二酸化炭素などの量よりも、圧倒的に酸素の量が増えた。
だから、環境を気にするという感情が人の心の中から消え去ったためかもしれない。

第三次世界大戦が起きた。

俺は軍を持って、他の国を圧倒的に上回っていた軍事技術を遺憾なく発揮している国、帝国『日本』の兵士だ。といっても自分から志願したのではなく、親や周りから推薦されて、軍に入れられたのだ。
別に、俺はそれを深く気にしているわけではない。ただ、『環境汚染されるから戦争は駄目だ』と言っていた親父が俺を笑顔で送り出したのを、俺は鮮明に覚えている。その頃はまだ、環境技術が進歩していなかったから、親父が戦争はダメ、と言っていたのかもしれない。
だが、子供の頃からずっと『戦争はダメ』と教えられてきた俺が、五年も戦場で生き延びて、軍の中ではかなりの有名人になっていることが、俺は嫌だった。
第三次大戦前に散布されていた新物質っていうのが、あとから人間の本能を呼び起こさせ、闘争本能が特に突出して目覚めさせられるというモノだと知ってから、親父は闘争本能でそんなことを言っていたと思うと、少しだけ安心できた。
といっても、結局一度動いた世界はもどることはなく、深まった溝はさらに深くなっていったので、戦争が余計に増え、以前はなかった小競り合いがいつも起きるようになった。

だから、今回のように俺たち兵士が日本とは遠く離れたイラク辺りに来ているのだ。第三次大戦で勝利した日本は、国連からは『戦争を止めた国家』として表彰された。そのおかげか、日本は弱小国の部類に入る国からは、紛争を止める依頼を受けるようになった。だから、日本は余計に戦闘を続けていく。

全世界から新物質が撤去され、それに変わる物質になったから良いものの、日本人は若い世代まで感染していたらしい。そのせいで、兵役に出る奴らも少なくない。むしろ増えているくらいだ。

第二次大戦後の日本は戦争をしないといったらしいけど、今ではその真逆だ。戦争バンザイ国家。俺は何故か感染しなかったから、見ている方からしたら気持ち悪いのだ。

まぁ、俺も軍人になっちまったから、もう気にしてないんだけどな。

なんども特進の推薦をされたが、片端から俺は断っていった。まぁ、無理やり特進させられたから、今では中尉の階級についている。

（……それでも、前線でガンガン敵を殺してるんだがな）

俺はそう思うと、自分を呼んでいた輸送車の中に乗る。中には負傷した兵士が数人いたが、他のヤツらは防弾装備のおかげで無傷なようだ。ギャアギャアと騒いで酒まで飲んで呑気なことだ、と俺は思うと、自分用に開けられていた最前列の席に座る。鉄が軋んだようで、音が聞こえたがいつものことだ。

持っていたアサルトライフルは使い物にならなくなってしまったため、戦場では障害使わないと思っていたダガーで闘ったせいか、体の節々が悲鳴をあげている。唐突にいつもとは違う動きをして、それをずっと続けるとやはり体はキツいようだ。

「中尉、お疲れ様です」

そう言って俺の隣に立って敬礼したのは、部下の――確か、岩鉦（いわかね）伍長だ。

こうして俺が部下の名前を憶え切れないのは中尉という役職にあるからだ。中尉と聞くとかなり下の部類に入っていそうなイメージ

だ。事実、四階級の中でも一番下の士官の上から三番目なのだが、部下はそれでも二十人以上はいるのだ。さらに、一度覚えたと思ったらすぐ戦死してまた新しく配属される。
だから、俺は特に覚えようとは思ってはいなかった。ただ、この岩鉦は俺が中尉になりたての頃からずっと一緒にいる奴で、コイツには案外愛着もある。下の名前は聞かされてはいないが、やるときはやるっていう感じのところが、俺は好きだった。
「お疲れさま、岩鉦クン。成果はどうだった」
「まあまあです。掠り傷を負いましたが、ほかは異常ないです」
顔を引き締めて、俺に言う岩鉦。どちらかと言えば童顔に近い顔立ちの眉間にシワを寄せていると、その顔が勿体無いと俺は思った。実際、女性のオペレータには好かれていたようで、軍の内部――俺の部隊を知っている女性なら、十人中七人がコイツを気にしているであろう。他三人はよく知らない。ただ、岩鉦によると俺のことを気にかけているヤツが多いらしい。それを俺はジョークだと受け流しているが。
だが、その顔の頬に掠り傷がついていた。たらりと流れた血の跡が少し残っていた。
「その跡、はやく拭っておかないとやりにくくなるぞ」
「大丈夫です。本部に到着してからそうします」
そう言うと、岩鉦はところで、と言った。
「今度の戦場は海上戦らしいですよ。でも、その前に中尉の表彰が先でしょう」
「……表彰？」
岩鉦が出した言葉に、俺は反応する。おかしなことだ。表彰されるようなことなど、別段下覚えもないというのに、表彰されるはずがないのだ。だが、岩鉦はそんな俺を見て驚いたようで、
「何を言ってるんですか、中尉。軍人でありながら、科学者としても優秀。科学者としてのほうで表彰されるのでしょう？」
「あ――ああ、そういう事か」

俺は昔から、科学についてとても詳しかった。最近の奴らは旧時代の基礎というものを知らないから、俺並のことができないだけなのだが、今の時代――つまり、二〇七〇年代から見たら、俺のやっていることは表彰に価することらしい。

環境技術が云々というこの時代だから、俺は過去のバイオテクノロジーを（今更だが）応用して有害物質の濾過器（ろかき）を作った。家庭向けのモノなので軍事用ではないのだが、電化製品などから排出されるフロンガスや、二〇四八年に発見された『Ｒｅ　－　Ｃｏ２』という二酸化炭素　（前に言った新物質とは違う）が何かの化学変化を起こした物質などを、人体に無害な物質――酸素や水素などに変換する装置だ。そのため、濾過器というより変換器なのだが、面倒なので濾過器ということにした。

おそらく、今度の表彰はこのためだろう、と俺は思う。それ以外に特に覚えがない。

だんだんと本部に近づいてきていることがトラックの車輪の音から解る。砂漠地帯から舗装された道路へと変わると、音が大きく変わることを知っていた。おそらく、あと五分もしたら到着するだろう、と思いつつ、俺は岩鉦と話を続ける。

「つっても、あれは旧時代の基礎を知っていたら、お前でもできるぜ？」

「何を言っているんですか……自分も少しはかじっていますが、あんなのは完璧に理解しないと作れませんよ」

と、岩鉦は言う。ため息混じりに呆れられたようで、俺は苦笑する。――みんな、俺にそう言うのだ。何故だろう、と疑問に思うことは多い。事実、俺の流用している技術は先ほど言ったとおり、二〇四〇年代のものである。だから、やろうと思えば皆やれるのだ。

以前、俺は同じようなことで表彰されたことがある。だが、やはり一部は俺が表彰されることについてよく思っていない奴らがいた。無論、これは今回の表彰の件ではないのだが……多分、今回もだろう。

と、そこでトラックが沈黙した。どうやら到着したようだ。岩鉦に会釈してから俺は席を立つ。空気が抜けるような音がなり、扉が開く。俺の後に岩鉦が続く。そこからぞろぞろと愚痴をこぼしながら、兵役を終える奴も少なくない。一度戦場に行って帰ってきたら、兵士をやめることも出来るからだ。

本部はもう目の前だ。先程の砂漠地帯とは比べものにならないほど固く、ごつごつした地面を歩きながら、ふと俺は思った。

戦争がなかった旧時代は、どれだけ楽だっただろうか。皆、幸せに暮らしていたんじゃないか、と。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0273o/

とある戦場にて

2010年10月8日12時15分発行